

長崎自然共生フォーラム News Letter

第4号 2007年6月1日 発行

序：論説にかえて —

自然とどう折り合うか

事務局長 川里弘孝

半年前、購読している「波」(新潮社)に同題の一文が目にとまった。これは動物学者で、現在、人間文化研究機構の地球研究所長をしている、日高敏隆先生の連載エッセイ(第123回)「猫の目草」のタイトルである。全文を紹介したいが、転載不可となっているので、書き改めて記してみたい。

まず地球研の新しい建物を京大演習林の一部に建てる際、広大な予定地には全世界から苦勞して集められたいろいろな樹木が植えられているので、それらは広い林内に計画どおり丁寧に移植されたという。たとえば世界の主要なマツ類のうち、大木となったものはほとんど移植が不可能なのでそのまま現在の場所に残し、ウツクシマツと呼ばれる特殊なマツは、集まっていないと周りの植物に負けてしまうので、大事に移植したという。

つぎに建物の工事の際、いわゆる名のある木：「名木」は大事にされるが、問題はここにもともと生え育ってきた草木たちである。林内にはモミジバフウ・ミズメ・エノキ・コブシなどが散在して自然の林をつくっている。戦後、列植されたメタセコイアは美しい姿で育っている。周囲は雑木林で、小鳥たちもたくさんいる。こういうときは、建設予定地一帯の木を切り払って更地にし、建物ができたあとでしかるべき種類の樹木を植えて、緑をつくりなおすのが普通のやり方だ。

しかし日高先生たちは絶対同意しなかった。そのようなことしたら、植生はめちゃくちゃになり、その土地とは関係のない木々が植えられ、ひどいときには日本にはない外国の樹木だって平気で持ち込まれる。それならもともと生えていた種類と同じ樹木の苗木をどこからかもってくればよいのか？そんなことはない先生方は考えた。最近では、種類は同じでも土地、土地によって遺伝的な違いがあることがよくわかってきている。動物も同じである。たとえ生き物の種類は同じでもそのような遺伝的な混乱を引き起こしてはならないのだと。また複雑な地形をした傾斜地である建設予定地をつぶさに歩いて、一本、一本の木を調べていったそうだ。これは手を

つけずに置こう、これは仮移植してあとで戻す、あるいはしかるべき場所に植えよう、これは今の時点で適当な場所に移植。これはもう大きくて仮移植はできないから、残念だが切り倒して材木として使おう。こうして一本、一本の木の処遇が決まっていたという。樹木についても草本についても決して遺伝子汚染を起さぬように、というのが目標だったようである。かなりの出費にもかかわらず、施工業者にしてみればおよそ面倒くさいことに違いないが、当事者はできるかぎり自然な環境を保ちたいという願いを持っていて、多大の力を尽くしてくれたという。また道の幅をどうするかも問題だったようだが、細かい林道をうまく使って道をつけ、車が二台通り抜けられるような「近代的な」道は断念したという。

当然ではあるが、計画者、設計者、施工者が一体となって事にあたる、意味ある配慮とはこのようなことかと痛感した。当フォーラムが目指す未来の可能性の一つとして、ぜひこのようことも探っていきたい。

特集 —

長崎自然共生フォーラムと 市民力

会長 宮原和明

●これまでの活動をふり返って

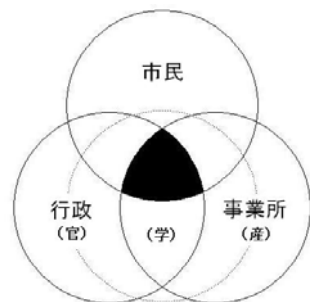
会員の皆さんお元気ですか？このフォーラムが立ち上がったのは当時長崎県自然保護課長の上杉哲郎氏の長崎への強いおもととこれからのエコ社会に向けての強いメッセージ性があったように思います。このフォーラムのこれまでの活動をふり返ってみますと、これからの持続可能な自然共生型社会づくりに向けて、スキルアップとしての講演会からの情報共有の側面が強かったように思います。そのため会員の大半を占める造園建設業の方にとっては、本業の事業に直接結びつくものでもありませんでした。一方バブル経済崩壊後の公共工事は減り、厳しい経営環境の風が吹いています。また長崎県内の自治体においても公共工事の産官情報の場も閉ざされたと聞いております。このような状況の中で本フォーラムの活動も低調になり、会長として大変申し訳なく思っています。またこれまでの反省点として会員の近況報告、技

術報告などに関連するタイムリーな情報発信ができるhp(ホームページ)作成や体制をうまく構築できなかったことは今後の課題です。

しかし、地球温暖化問題を座視しながら、これからの地域社会のビジョンを考えると、必ず持続可能な自然共生型社会をイメージせざるをえません。事業所としてISO14000 シリーズや EA21 の認証をとることも必要なことですが、われわれはまた市民社会の一員でもあるのです。そのことを考えると長崎自然共生フォーラムは皆さんにとって必要な組織なのかもしれません。次のステップに向かって一緒に頑張りましょう。以下に私の考えを述べます。

●これからの社会は行政、事業所、市民のパートナーシップと市民力が求められる。

1992 年ブラジルのリオデジャネイロで国連の環境と開発に関する会議(リオサミット)でアジェンダ21が採択されました。アジェンダ21は持続可能な発展つまり持続可能な地域社会づくりを担う主役は自治体であると述べています。そのことがあって私は持続可能な地域社会をつくる「日本の環境首都コンテスト」に係るようになりました。いま自治体は地域の特色を生かしながら、創造的かつ多種多様な施策・事業を戦略的に展開することを求められています。持続可能な地域づくりの過程には住民の主体的な参画によるパートナーシップ(協働)も不可欠になってきます。このような取組みを積極的に加速させている先進的な自治体は九州内では水俣市、北九州市などです。長崎県内の自治体はこれからです。図は行政、事業所、市民の係り方を示すフローです。



黒い部分が各セクターのパートナーシップ(協働)が成熟するイメージで、長崎自然共生フォーラムの場です。

行政(官)、事業所(産)の中間に(学)が入るイメージですが、これらのセクターでありながら、もう一つは市民セクターなのです。これからの持続可能な自然共生型社会をイメージするとき、我々はいま図の下方のセクターに属しながら、市民セクターとして他のセクターとのパートナーシップを成熟させることが必要なのです。

長崎自然共生フォーラムは産・官・学の連携によるそれぞれ立場に配慮しながら、パートナーシップ(協働)を加速し成熟させるために重要な組織であり、場であると考えます。近年の国や県の環境共生事業は各セクターが集まったNPO 法人や組織への補助が多くなりました。我々は各セクターに属し、専門性を生かしながら、市民力としてのパートナーシップ(協働)を深める場と

して、このフォーラムに参加し、国や県などの自治体からの補助事業にもトライしましょう。

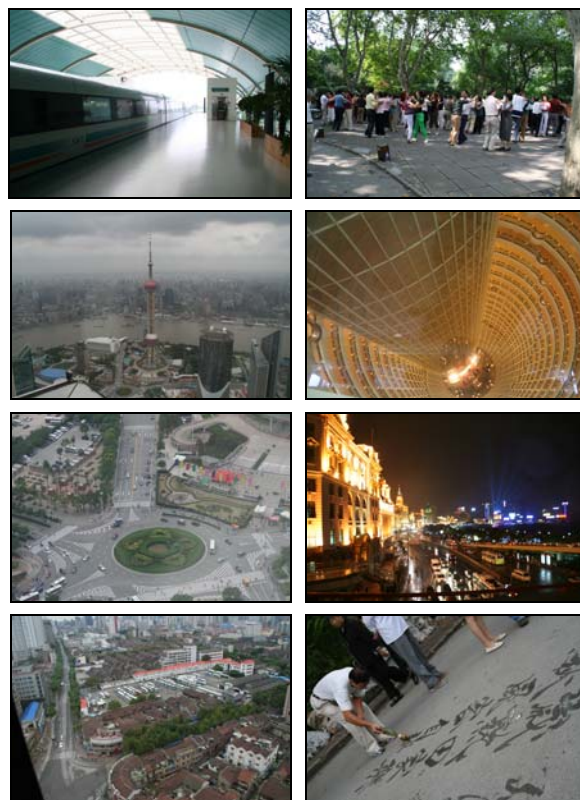
長崎県は地球温暖化防止のCO2吸収源対策として森林環境税を導入する事を決めました。皆さんが専門性を生かして参画できる事業も出てくるでしょう。大いに長崎自然共生フォーラムに参加し、持続可能な自然共生型社会づくりに貢献しましょう。

特 集 —

上海エコツアーから

会長 宮原和明・事務局長 川里弘孝

9月16日(金)から18日(月)にかけて、菅社長を団長とする、エコシステム(株)の「上海視察旅行」(総員34名)に個人的に参加させていただいた。当会の宮原会長、武政委員、鈴木監事も同行した。主に上海市と水郷古鎮が中心である。当地には数回、訪れた方々も多く、郊外に向かう車窓から見る市街地の変貌ぶりに、日本の高度成長期を思い起こしたという。筆者も旧上海の街並みの面影を探索したかったが、空港からの最高時速430kmのリニアモーターカーはともかく、市街地に林立する高層ビル群に驚嘆した。超近代的なビルと市内に残る1,2階建て住宅、昼間の街中を歩く人たちの小綺麗な服装と夜見た一般市民のたたずまい、など落差はあちこちで見られたが、北京市ほどではない。北京では政党性が強かったが、商都上海ではさほど感じない。それにしても、毎昼夜の北京料理・海鮮料理・上海料理など美味、豪華な中華料理を味わった楽しい旅行であった。



(撮影 宮原和明)



(撮影 川里弘孝)

談話室 —

「環境シンポジウム：人と植物 ～環境再生をめざして」から

去る 2006 年 6 月 28 日(土)13:30 から、県立美術館ホールにおいて、NHK 長崎放送局主催の、池田(本会顧問)、隈(県立美術館設計者)、伊藤(県立美術館長;コーディネーター)の 3 氏によるシンポジウムがあった。

池田先生の話は、「海岸線はいわば自然の生命線である」ことを念頭に、針尾埋立地の再生を考えた(ハウステンボス:HTB)。それには、まず生態系の完成を目指して森づくりからはじめることとして、敷地内に 40 万本の樹木を植栽した。その結果、HTB 完成後 10 年経つが、今ではコムラサキやハヤブサなどの生息が見られる、森となった。自然を回復するのに 1,050 億円かかった。という趣旨であった。

隈氏は、もともと外部空間と内部空間をつなげる役目

とっていたが、池田先生とお付き合いするようになって、さらに建築体として呼吸する仕掛けを考えた。特に水をみながら楽しむ空間づくりを目指した。つまり自然と建築との溶け合いを考えた。たとえば安藤広重の浮世絵の世界、万里の長城、ゴッホの絵画にその兆候をみることができる。最近では、下関の土堀(日干しレンガ積み上げ;40~50cm)に魅せられている。との談話があった。

主な質疑応答では、問;再生するのであれば無理に埋め立てなどはしないで良いのではないかと(答;それはそれとして、自然復元には時間をかけなければならないこと強調したい。人間以外の生き物を大事にすることが必要。自然の素材は素晴らしい、自然呼吸ができる茅葺・土壁などの伝統文化～古い知恵、への見直しが必要ではないか)。時間の考え方、物を大事に使う姿勢が必要ではないかと、問;何処まで再生したら再生と言えるかと(答;六本木のビルの経験から自然共生の道へのめりこんだが、人間以外の生物を大切にするという、近代合理主義(目先)と違う東洋文化(哲学) を作り上げることが重要。日本の大工は高いレベルにあるといわれる。自然との折り合いがついた時点が、共生・再生のゴールだと思う。) 問;地球規模の環境変化をどう受け止めるかと(環教観をお聞かせ願う。(答;南米のハチドリの話がある。自分に出来ることは何か、考え実践する。これしかないという環境観・人生観を持つことだと思う～池田。 自分は個人の努力と全体の努力のつなぎ役になることだと思っている～隈。)、など演者とのやり取りがあった。

(感想) 武邦先生は齢(よわい)82 と仰っておられた。発想力、考え方にいささかの衰えもない。何とすばらしいことだろう。ハヤブサは高層ビルの大都市(ニューヨーク市) で元気に暮らす例もあって一概には言えないが、根幹となる植物的自然が復元・再生していることには間違いない。申し込み入場の会場には長崎大の斉藤学長、総科大の林学長のほか、一般市民、本会の宮原会長、鈴木監事の顔も見えた。(川里弘孝)

談話室 —

街角のゴミ拾い雑感

再就職先を退いてから、土曜か日曜の早朝に行っている、町内のゴミ拾いも 1 年余が過ぎた。永年の勤務の習性もあり、少しはアピール性があるかと始めたが、町内のメインストリートを一巡するのにたっぷり 1 時間半以上はかかる。分別収集しているので、通常、スーパー袋 4 つにはなる。

当初は菓子袋、家庭生ゴミ (卵殻、パンの食べ残しなど)、犬の糞入り袋、タバコの吸殻、空き缶、ペットボトル、不燃物など諸々の展覧会だった。大袋が足りない。それに河川・川岸での不純物の散乱も凄かった。しかし、最近ではゴミの量が少なくなったように感じている。児童・生徒の買い食い時のポイ捨てが激減し、犬連れ散歩

の人たちのマナーが良くなったせいと思われる。加えてご近所の方々の庭先の清掃も励行されている。残念なのはタバコの吸殻の量が変わらないことだ。子供たちの改心には、大人顔負けである。何はともあれ、タバコの吸殻のポイ捨ては大変見苦しく、諸悪の根源とも言える。このままでは「美しい日本」も程遠い。

また毎月1回、右岸・左岸それぞれの町内会で清掃・草刈はやっているものの、河川の清掃は骨である。上流からのタイヤ、ビニール袋、空き缶・ボトル類も含めて完全に取り去ることは出来ない。とはいえ、川岸を散歩・ジョギングする人が増え、生き物とくにトンボ類、シラサギ・アオサギ・ヒタキ類などが飛来するようになったのは嬉しい。

大村湾を美しくする会でも河川清掃は重要事業として取り組んでおられる。農村であれ都市であれ、ホモ（同質）な世界にはヘテロ（異質）を持ち込まない。これは環境保全の原則だし、美観にもつながる。わずかな働きではあるが、捨てる人あれば拾う人ありの精神で、いささかの力添えになればと思っている。また、“おはようございます”のお声がけもしている。これも地域の連帯感につながるかと淡い期待をしている。（川里弘孝）

事務局だより

当会も後援した、「日・中・韓国国際ランドスケープ専門家会議及びシンポジウム・日本造園学会九州支部大会：長崎大会」は、2006年8月28日から30日に、無事、成功裡に終了した。当会から宮原会長が実行委員会幹事長として、久保田委員が事務局長、川里事務局長が実行委員会事務局へ出向した（牧事務担当も加勢した）。何故か中国20名、韓国10名と参加予定が半減したが、合同大会でもあったためか、アトラクションの蛇踊りが圧巻だった「交流会」には174名の参加があった。

「東アジアの造園文化の普遍性と独自性」がメインテーマのセッションは、中央、地元ともども高いレベルの研究発表があった（当会、田中幹事も発表した）。「造園教育のあり方」をテーマとした、学生フォーラムでは、留学生ならではの体験も含めて、示唆に富んだ熱心な討論があった。同時に行われた学生コンペ、ポスターセッションでは多数の応募があり、賑った（当会の菅運営委員の会社も応募した）。

専門家会議は「長崎宣言」で閉じられたが、合同大会のメインである、シンポジウムは地元、林学長の説得力ある基調講演と、養茂理事長の好リードによって、日中韓のパネリスト5人の興味ある話題提供があり、充実したパネルディスカッションとなった。

最終日は、テクニカルツアーと支部大会が並行して催されたが、それぞれ中味の濃い内容であった。エクスカージョンのうち、旧円融寺庭園（大村）では、当会の為永副事務局長が解説を担当した。また、夜景ツアーは、生

ビール片手に1,000万ドルの夜の景観を楽しんだ。当会の久保田委員と共に事務局を預かった者として、資金的な援助を受け、共催したユネスコ・アジア文化センターと都市公園整備促進協議会をはじめ、協賛いただいた方々、それに絶大な現場協力を得た市造協、古賀植木園芸組合、九州大学、長崎市みどりの課、そのほかお世話になった多くの皆さんに心から感謝したい。

大村市にある『とりかぶと生活科学研究所』『とりかぶと自然学校』（エコシステム株・菅社長開設）が自然共生の実験・実践の場であることは、関係者の誰もが認めるところである。

最近、敷地が拡張されてますますその雰囲気が充実された。広場も新たに造成され、旧敷地内に新設された池にはトンボ類も飛来するようになった。相変わらずイノシシは頻繁に訪れているみたいだが、三原さんお手植えのレンゲ畑が来春、見事に再生されることを祈る。新たに購入された所で、極め付きは河川手前のクヌギ林である。茶室棟の座敷に座り、雪見障子を通して見る眺めは絶品である。菅さんのセンスを賞賛したい。人間の生活と一体化した景観・風景は何にも変え難い文化である。来年の当フォーラム総会はここで開かせて頂くかとの誘惑にかられた。（K）

【編集部から】

原稿を募集します。論説・随想・紀行文・技術報告・写真等、体裁は問いません。最低1,000～1,200字程度でお願いします。二段組みはこちらでやります。E-mailでの投稿、大歓迎です。（M）

(nagasaki_coexistence@hotmail.com)

事務局	会長 宮原和明 〒851-0123 長崎県長崎市網場町536 長崎総合科学大学建築学科宮原研究室（担当：牧） TEL：095-838-4114 / 095-838-2481 FAX：095-830-1281 牧：090-7161-5408 E-mail：Nagasaki_coexistence@hotmail.com
アネックス1	事務局長 川里弘孝 〒856-0824 大村市水田町1098 （長崎大学大学院生産科学研究科） TEL：0957-50-1355 FAX：0957-50-1355
アネックス2	副事務局長 為永一夫 〒856-0820 大村市協和町790（株）タメナガ造園 TEL：0957-54-0271 FAX：0957-54-1127
アネックス3	副事務局長 松田英明 〒851-2212 長崎市畝刈町1613-251（株）松田久花園 TEL：095-850-0714 FAX：095-850-0715
アネックス4	副事務局長 山本規仁 〒857-0103 佐世保市原分町1052-3 山本造園土木（株） TEL：0956-49-3939 FAX：0956-49-4747
アネックス5	副事務局長 田維泰裕 〒857-1161 佐世保市大塔町574-5（株）庭建 TEL：0956-31-2011 FAX：0956-31-2310